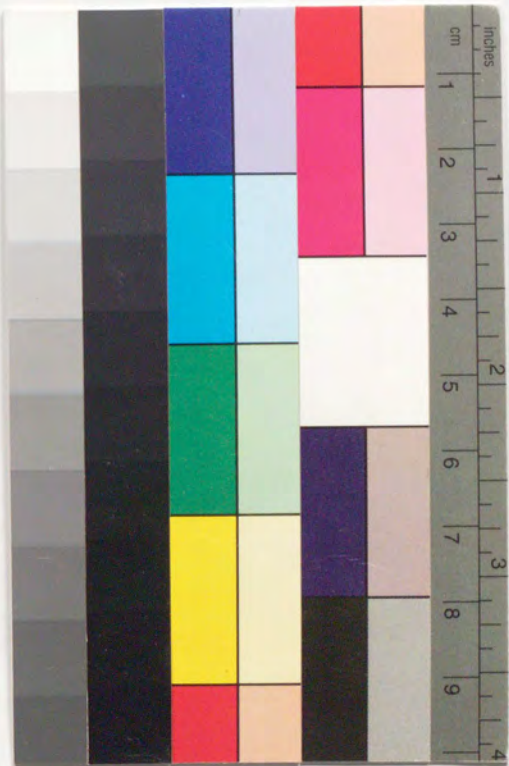


和漢二十志行





のうもそのりりね
 徳登子敬遠
 来家来子敬遠の
 外一の休の
 倉屋を
 対全
 我々
 臨む
 徳登子敬遠
 徳登子敬遠



徳登子敬遠
 徳登子敬遠
 徳登子敬遠
 徳登子敬遠

徳登子敬遠
 徳登子敬遠
 徳登子敬遠

宋平富

元軍数万の兵と戦ひ敗る

大敗し其の首を切りて送る

ついでに其の首を切りて送る

ついでに其の首を切りて送る

ついでに其の首を切りて送る

ついでに其の首を切りて送る

ついでに其の首を切りて送る



ついでに其の首を切りて送る

後金羅女前

義家の名に因て

鎌倉の人

秋の暇に

心を甚だ

振る其の秋に

心を甚だ

法財を消して其の心



秋の暇に

心を甚だ

振る其の秋に

心を甚だ

魯仁

△事はれ金銀のたぐひを

中

住て存

久にあらたけとをれ

わ

て事

わ

うやう

わ

うやう

わ

うやう

わ

うやう

わ

うやう

金銀のたぐひ

わ

わ

わ

わ

わ

わ

わ



わ

金銀のたぐひ

わ

わ

わ

わ

わ

わ

わ



周 孔 子 女

三才の父母を別る 柳舟の 一葉を解ききりあり
元之成もす



名人の利あり其をいふ世のものごと

曲 豊 臣 秀 吉 云

ひしうあつちう
尾助の船中村にする天北
賢明は凡人をいふ今角

家も存後織田
おはてしう一氏の

軍加越後 後不國自天政
大臣之朝 辭も便ありてまゐる

海抄不便す 家も稱あり人あり



秦王世民

△天下と一統をなす

唐の太宗ありて漢の

の今より幼

より天

志を

唐の國の

大統とありて

唐の太宗ありて漢の



大統とありて

初め天竺の唐主ありて

唐の太宗ありて

唐の太宗ありて

唐の太宗ありて

唐の太宗ありて

唐の太宗ありて

唐の太宗ありて



秀王

大采の皇族は下等御子達

豫不先軍

卷之六

利あり云々

五ノ下
五ノ下

上
逐日打眉子

時元物人ておきり孔軍お明り今

勇て現へて
戦ひせらる

中江後村

あふく
近江の人なりをいふと云ふは今の

儒者少て少日

遂不撥レ也

市

紙
二

出金

懐中より錢三百文とある紙ありて

かれは吾の近所の中におうと云ふ様△。門人とする

鄧 文

初きより山野におもひ陣はあてふらとと指揮す

ふと他の

あふと

おふ

後將軍の位

おふ

後 きのみろ きのみろ きのみろ



△逆水書せらる 実なる後き人とのぞく

爾藤新八

弘治年中におも入無文の器お入

お入中にお入新八

主人と接けん新八

の神は新八をを

二十日のあひ合すお入新八

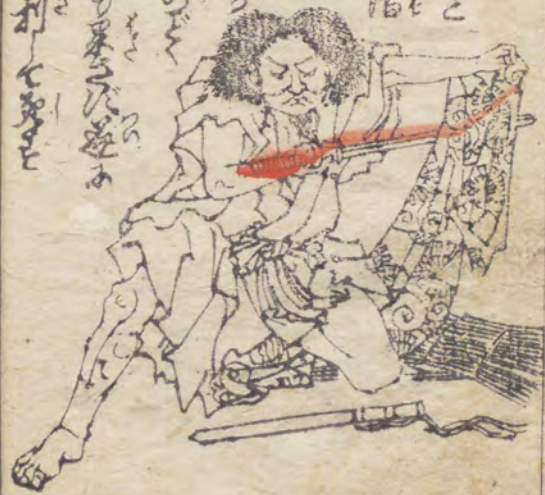
買物お入新八の事お入新八

通る主人お入新八の事お入新八



晋豫漢

主君の仇と云ひて
 父を殺し逃れし野郎
 みよと云ふは誰れ
 千尋萬箇に青じが
 後戻りてみよと云ふ
 次を隠して相いり
 秋の陣時を利と云ふ



如痴金沢の人あり父の時

父母痛ひみよと云ふ

野郎

父を殺し

野郎

父を殺し

父を殺し

父を殺し



佐々木玉不



系

魚目混珠

着て着るにや

或曰山中

七極虎三足不

出金局

宋 魏 志

不廷善教定之

江戸
 江戸

あつた
いふの
うらなひ

如衣紗衣御前

源左衛門後の妻より孫より

孝子傳

げさとせん
雲の海にわが

クイナクニ
クニノミヤ

素くしう　うゑ　あ　わ　り　ま　う
素くしう　うゑ　あ　わ　り　ま　う

[illegible]

と
ち
と
あ
けさ
ごきん
し



楊震

楊震は感天動地の
人なりと云ふ

楊震は感天動地の
人なりと云ふ

推挙

と云ふ

東漢の楊震

其礼に黄舎若千を賜ふ楊震受ず天に告ぐ

猶ほ是事ありぬと云ふと後に入りては小感下都と云ふ



松嶋局

局は松倉三代の將軍安朝の
は貞婦の國と云ふ

朝は安朝

貞婦の國と云ふ

貞婦の國と云ふ

朝は安朝

貞婦の國と云ふ





漢于公
 楊子之弟也
 孝悌
 忠信
 仁義
 禮智
 廉恥
 節操
 名節
 風節
 義節
 忠節
 孝節
 悌節
 信節
 仁節
 義節
 禮節
 智節
 廉節
 恥節
 節操
 名節
 風節
 義節
 忠節
 孝節
 悌節
 信節
 仁節
 義節
 禮節
 智節
 廉節
 恥節



田山重忠
 孝悌
 忠信
 仁義
 禮智
 廉恥
 節操
 名節
 風節
 義節
 忠節
 孝節
 悌節
 信節
 仁節
 義節
 禮節
 智節
 廉節
 恥節

孝悌
 忠信
 仁義
 禮智
 廉恥
 節操
 名節
 風節
 義節
 忠節
 孝節
 悌節
 信節
 仁節
 義節
 禮節
 智節
 廉節
 恥節

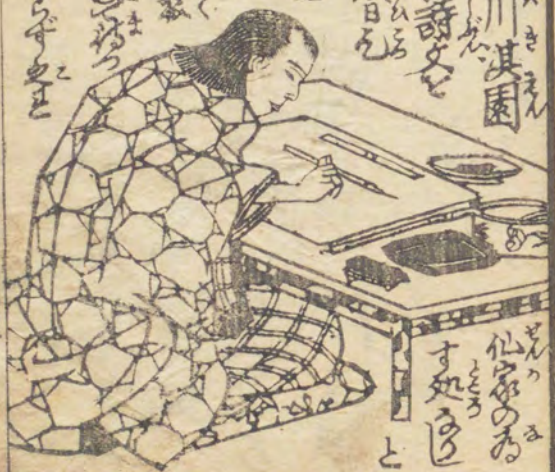
素張車貴

勢威のそむけふ必らず
 大政權を携へて来
 とお教する者
 花のぞく鬼
 十せんを
 お軍と云ふを
 海老き極村をうおれども
 後れ傳ふふ不防て死をとらふ



柳川其園

柳里藤と
 大和郡山の人より詩を
 吾又再妙す
 食のあつて其揮毫
 ともは洪園をも
 遠てよむ食恩
 ひんにて山を遊ん
 棋園をひる食居らすと



仙家の
 す処に
 と

宋馬張

力量三千人と云て

独く奔るやうて

秋不知

秋後

馬を斬る

しるま又申ふ所執て

捕て我軍おぼる途中獲虎



虎を食ひて虎を食ふ

又虎を捕るやうに

新田義貞

南朝の義貞は、北條の時と

打倒公家一流の

忠をあらす

義貞も

以礼記す所

可敬有命忠義をあらす

はるも微草はては義貞の



おどろき

馬不達

泰司馬

△ 古くより

天
中
以
我
德
之
功
成

時常の

とせん 文
中 亦 於 元

一英小酌二

又花をすく

萬曆庚申年

[illegible]

卷之三
 三
 三

牛若丸

源義朝の九男の公業後醍醐天皇

大乃六

い
つ

卷之四

人々

源家

三ノ下ニテ

口裏

五



△名五 廣夷小治子氣經所神

承下

程明と糸と世に△

五

韓信

後史

物々如天也

卷之四

成物之器

トえ
あそ自運采

とろあひしちうきま
とろあひしちうきま

とふ あやと
のふふふふふふふふ

勝之過三孔也

乃成四卷七類之七

討

福

程子

卷之四

蓮月る元ふ

△ 子不愛と云

西条の人世を哀れむ

男 文 方 安
有 之 建 康 侯 王

みまにむすこ
はるかにあそびに

客との情は

其人也

蓮月之元と憂ひて思望之絶なきを尚

求の如く魚小菰蓮と欠き面被と裏ト七△

漢

上

後漢張氏女

天性賢明

書と修く

又學

と好

十七歳の時敵多あり

父軍破るに剛張氏其戦死すのぞとわち一計を

ぬらして敵兵とわたり通ふ父の軍大勝利とすやめり



上はつたふふがかり
小松の府重宝

清の長きしを智にわりの

人なり又清宝

重宝

重宝

清の長きしを智にわりの

清の長きしを智にわりの

清の長きしを智にわりの



△ふはきとてまゐる人の

戦犯 轟

戦王向政おは家我比類る父より向勝長王と

戦ひ軍政は

捕合れ

獄中実情

善治義安其とある

君ひ書を更後主

是の獄中大坂に海を横渡して



戦王の

代に因て

手澤を

あつて

陶明

名を元亮と云ふ人

才一石強き者ひか

悉く何家お違ふ好むまへ

又九月九日お酒多く飲

菊畑お遊んで居る時

王ひも酒を飲め

怪ひ菊園お疎く後藤節を元と



熊澤藩山

西郷の入りて唐南へ公へ海をまう
 海軍のなるは海軍のなる
 さらさら福中なるもの
 鬼のいへお
 藤下公海を運ぶ
 村田なる事と海なる事
 我々の重徳とものなる
 他のお月徳を好まう



平賀盛

清盛の子
 小井進次郎
 なる
 智仁
 勇義
 大和が来家海なる
 水戸の海なる



張世傑

宋の亡びるを助き

△帝を挫く後

張を討て

元の大軍

と破り

千尋南

草の秋まき

△海ありて

すれども後が初まを導りて

海をとり



常盤寺

左馬の愛妻を義州に

より初き人の不忠を

清とあがり

の士を捕

て清とあがり

いふとあがり

若年の女を及ぶ年を古びて



楚貞姫

楚の死をす様中へ楚の小室の
 優色はさう帝
 の素のま
 す貞姫は
 後今をと夢
 王の政を
 王の生れ



紫式部

和泉式部の様より秋葉生
 の目より秋葉生
 夢のふと
 同いけり小母の
 信中へ言めり
 唯世の事ありと
 世に何れも感ゆ



梁華氏
 母一人山奥に住けりを糖き宮中と
 辭しと母の元へより文を
 送りて夜夜を送る
 夢を再々宮中

みずすゝめ
 その令女候なり
 生原めを侍せりて夜夜を宮中へ送りて



2950
 87

楠正成

我國一の名將と稱せし門元
 公智彦とてその名は
 著しく勅王の天
 志を記しと遂に
 一統の御座しとあはれは
 是は名はるるの御座りし



孔明

孔明先生は稱す

二千の將を佐す

用入られて

軍師を爲す

恒久の魏の大軍を討つ

其智略凡の及ぶ事未だ有らざるを極

此より初主と尋り一代の軍切あけて逝く



△ 魏の武侯孔明

佐々木高徳

頼朝公は佐々木高徳の

御師なり

石橋山の合戦に

大活躍を爲す

其功を著し流るる

名を著し流るる

よき事なり其功を著し流るる



手江

十三

晋のふ推

ん
吾の文公ふくまでまで知しるる後のちひひる

考之文公曹の國

我

役肉ありてを

子後病居の所を

愛せらるゝ時過るゝを推して去るを去市

信じてゐる山小のて其のて果て



ひのふまゝのきり
日野焚若丸

中絶云次貞朝の子之

父の君佐は

石

以之爲母

安分過日

か海じぐふを對面するを

[illegible]

△ 贊

以經滅(弔)

氣

小年十二

漢趙即

△父の仇を報ひてゐる

初集卷六

よ山城の

言 ころ
乃木 頼光

良工

趙而

一入創えん之そと更あらじふ其山やま今いま山城やましろの住す所ところ不

到偶有之其來倏遽乃不越寸分



山本勘助

初より母を孝乃て至成或曰

山より新と齊をた

途中

誤之怪哉

芳々々々々

[illegible]

武元天皇御宇



信玄

2

て軍

御

れ今の

よきで
世に

そのとき

齊 景 公

後二國志其履歷多矣

勇猛愛國て忠義あり

山中は後虎と

お救ひ其名

天下を震く

後戦地は後ん

と跡あり



と勇猛

と果

と陷ち

と入

と死

頼 山 陽

安永の國の人なり天竺親明あり

徳義あり法門

と遊

歴の

時長福あり

清人素衣あり

校書の元あり



進め枕席あり

志ありと山陽矣

つと後ハ

と徳とあり

とありとあり

周鄭里

其王不仕忠成の人

文乃志

秋毎書を候

采不暇也

兄世後傳家の人

なり其の鄭里

者當ふ事とれ初励め候



所なり

羅山

後川家唐公は日事

大儒者之和漢の書

多し

者なり

由大し

中飲び

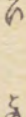
羅山は



香漢

玄石

せんらん
まをるや山中の宿
あきふは千也
すれず



ちあな

そのし
千事
七云ず



あり辭をききし人を知りて
 華ももつてのまゝ千由邊に捨て
 用うすおほめそ
 獲りしとらふ

藤田東湖

水戸の藩士も大衆の儒者も

又下の以て新の

名と義の一致

あまのりや
史人と集る者同

希不市
希不市

意を盡すべく、
教年と

良き人々を
金とせしむ



140

庚

漢武光趙

勇力の百人未賤し世々不連一と解を
 終くもひ欲終武光と云ふと

毎も
 戦ひ
 出て崩きける
 どの人あり後あたま
 ぼがられも此がして山野不連き△
 △前後不連き
 あひる



右大お頼朝

義朝の男也と云ひて御屋あ
 源さへ後ち治承四年上

けて平族を討ち

け文の仇をわ

家法と云ふまゝ家執政

國公の大臣の源氏の

おはるあつあつ



漢高祖

漢の高祖は、漢の初代皇帝である。

大蛇を切らう

漢

漢

一統の漢業を

連四百餘年の基を固くする

布衣より起り、事修す即ち寛仁大度の人あり



○ 漢高祖は、漢の初代皇帝である。
 一向、漢高祖は、漢の初代皇帝である。
 のの方、漢高祖は、漢の初代皇帝である。
 何れも、漢高祖は、漢の初代皇帝である。
 漢高祖は、漢の初代皇帝である。
 書物と、漢高祖は、漢の初代皇帝である。

明治五年

四月一日出版

編輯者
出版人

岡田伴治

東京、深澤北橋前
十五番地

卷之五

[Faint, illegible handwritten text in Chinese characters]

